

守屋哲治（金沢大学）

日本語のモダリティ研究は、日本語研究独自の陳述論の影響と西洋の言語研究の伝統の影響を共に受けながらも、モダリティの定義・範囲・認定の仕方などに独特な点があり、学者の間でもモダリティの捉え方に違いがある（尾上 2001, 黒滝 2005）。このため現象記述的な研究が多く、他の言語との間でどのような違いがありどのような共通点があるのかも必ずしも明確でない。

本発表は、日本語の歴史変化および韓国語との対比を通じて日本語のモダリティ体系の特徴を明らかにすることにより、現存する日本語の多様なモダリティ観の当否を具体的なデータによって検証することを目的とする。

本発表では、epistemic 及び deontic モダリティを表す助動詞を対象とし、まず古代の日本語から現代の日本語にかけてどのように変化してきたのかについて、具体的なデータを分析し、1) 古代の日本語では「む」「めり」「まじ」のような epistemic モダリティの助動詞が中心の体系であったこと、2) 古代語から現代語にかけては epistemic と deontic のモダリティ表現の役割分担が「なければならない」や「にちがいない」のような迂言的表現の発達によって確立したこと、3) 英語の助動詞（例：must）などのデータを基に言われている deontic から epistemic への一方向的な発達は日本語に関してはあてはまらないが、主観化(subjectification)は一部当てはまると考えられることを指摘する。

次に、韓国語のモダリティ体系との比較を行い、1) 韓国語では日本語と同様に迂言的表現の発達によって epistemic と deontic の表現の役割分担が見られることから、2) 日本語と韓国語のモダリティ表現の発達の背景には、共通の言語的（例：言語接触または同系性）・文化的要因が存在する可能性があることを指摘する。

以上のことから、1) 「客観的な命題」を表す部分と「話者の主観的態度」の二分法というものが通時的変化を考慮に入れると必ずしも明確にはできないことがわかり、このような二分法のあり方に対して考慮の余地があること、2) 主に西洋の言語のデータに基づいて立てられた文法化の唯一方向性の原理を無批判に取り入れると、日本語のモダリティの姿を正しく捉えることができなくなるので、文法化の原理で日本語にもあてはまるものとあてはまらないものを峻別し、どのような要因がそのような差を生むのかを探る必要があること、3) 日本語モダリティの特性把握のためには対照言語学的なアプローチに基づいた言語的・文化的面からの考察が有効であること、これらの点を現在の日本語モダリティ研究に対する示唆として提示したい。